

② 令和5年度 学校評価【計画書・報告書】

加賀市立 勅使小 学校 校長 細川 貴代 印

<b>学校教育ビジョン</b> (喜んで登校、満足して下校) ・学力向上ロードマップや学校研究を通した学力向上の取組 ・豊かな心を育てる教育と生徒指導の4つの視点を生かした取組の推進 ・健やかな体づくりと命を守る力の育成 ・教職員の指導力向上と組織的な学校運営の推進 ・家庭・地域との連携・協働の推進と郷土を愛する心の育成										
---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果(中間)	判定結果(最終)	今後の改善策(最終)
①教育課程・学習指導	子どもが主体的に授業づくり	子どもたちが自分の考えをもつことができるように、「個別最適な学び」と「協働的な学び」、教師のコーチング力の向上に取り組む。	研究部 教務部	学力テストでは無回答が多く、自分の考えを持っていない児童が多い。自由進度学習も取り入れ、單元構成シートや評価問題を活用した授業改善に努めている。  児童が？を持ち、自分たちで解決しようとする授業づくりに努めているが、教師の発語が多いため、「児童が主役の授業」として十分ではない。より児童中心の授業にしていなければならない。	【成果指標】 授業改善によって、児童が自分の考えを持つことができた。  【努力指標】 教師のコーチング力の向上を図り、授業改善に努めたか。	自分の考えを持つことができた児童が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	児童に対してアンケートを実施(7月・12月)  教職員に対してアンケートを実施(7月・12月)	A	A	自分の考えを持つことができた児童は84.2%だった。また考えをいろいろな方法で表現した児童は93.6%であった。今年度で「個別最適な学び」「協働的な学び」の自由進度学習を実施することができ、今後は実践内容や課題を共有し、改善策を話し合いながら授業改善をしていく。  肯定的に回答した教職員が100%であった。どの教職員も、児童が考えを持って話し合ったり課題を解決したりできるように努めているが、どの児童も考えを持ち、話し合うには十分ではなく、改善が必要である。より考えたいくなる。また考えを話し合える発問・表現の手帳(後・10T)の活用・話し合いの場の設定の工夫を今後も続けていく。
②生徒指導 ※いじめの未然防止	共感的人間関係を育みながら、自己決定できる集団づくり	毎月の生活目標は自分たちで話し合っ決めて、取り組む。自分や友だちのよさを感じ、伝え合う集団づくりをする。(ChokuUGa)	生徒指導部	自分にはよいところがあると意識できない児童がいる。	【成果指標】 自分にはよいところがあると意識させられたか。	自分にはよいところがあると回答した児童が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	児童に対してアンケートを実施(7月・12月)	C	C	肯定的に回答をした児童が77.6%だった。取り組み方に学年で差があり、今後そろえていけるとよい。また、自分の振り返りに留まり、友達のを共有するところまでいかなかったの、そのような場をもつようにしていきたい。
③キャリア教育・進路指導	主体的活動の重視	児童会やファミリーを中心に児童会活動を企画運営する。教師のフィードバックや子ども同士の認め合いの場などを設定する。	教務部 生徒指導部	昨年度は、肯定的に回答した児童が90%で、どの学年も児童の主体性を大切にしたい取組が行われているが、成長を実感できていない児童もいる。	【成果指標】 児童会活動や学校行事などを通して、子ども自身の成長を実感させたか。	学校生活を通して、自分の成長を実感できた児童が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	児童に対してアンケートを実施(7月・12月)	A	B	肯定的に回答をした児童は85.7%だった。教師のフィードバックや子ども同士の認め合いの場などを増やし、自己肯定感を高め、成長を実感できるようにしていきたい。
④保健管理	自己調整力を働かせた計画力の向上	自らの生活に課題意識を持ち、メディアコントロールを通して、生活をよりよくしようとする力の育成に取り組む。	健康教養部	日常的なメディア利用の実態を自覚しておらず、児童が課題意識を持っていない。	【成果指標】 メディアとの付き合い方に課題意識を持ち、メディアコントロールに取り組んでいる。	メディアとの付き合い方に課題意識を持ち、メディアコントロールに取り組んでいる児童が A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 75%未満	児童に対してアンケートを実施(7月・12月)	A	C	もりプロ第3弾では31.3%がめあてを達成しており、第2弾からのめあて達成率を維持できている。学校評価アンケートの結果は33.8%だったが、これは、学校保健委員会の講話も経て、児童や保護者の中で「あてはまる」の基準が上がったためだと考えられる。今後も、児童がメディアコントロールでできるような取組を継続していく。
⑤安全管理	教師の危機対応能力と児童の危機回避能力の向上	避難訓練と防犯教室の実施	生徒指導部 総務部	教職員の危機対応能力の維持とともに児童の危機回避能力を向上させる必要がある。	【成果指標】 教師の危機対応能力と児童の危機回避能力を向上させることができたか。	教職員の「危機対応能力」が向上したと回答した教職員、自分の「危機回避能力」が向上したと回答した児童がともに A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員と児童に対してアンケートを実施(7月・12月)	C	A	事前に若プロで「避難訓練」のねらいや指導のポイントを共通理解した。また、児童には不審者対応における避難訓練の事前避難の仕方などを指導したり、防犯教室で学んだりすることができた。
⑥特別支援教育	全職員による児童の実態の共有と個に応じた支援の実施	児童理解の会を月1回実施 専門相談員、特別支援教育アドバイザーを必要に応じて派遣要請 児童の実態に応じて個別の指導、少人数指導の実施 支援員の適切な配置	生徒指導部	気になる児童がいたときに共有する体制が整っている。共有後も継続的に児童に応じた支援が必要である。	【成果指標】 児童理解の会を通して児童の実態を共有し、その後適切な支援ができたか。	「児童理解の会」を通して児童の実態を共有し、その後適切な支援ができた。と回答した教職員が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	教職員に対してアンケート実施(7月・12月)	A	A	全職員が肯定的な回答をした。若プロでも特別支援に關した研修を行えたり、児童について全職員で共通理解ができた。
⑦組織運営・業務改善	負担減、時間外勤務時間の削減につながる業務の効率化	校務支援システムの利用を通した業務の効率化(通知表・指導要録の作成)	総務部	学期末や年度末の通知表や指導要録の作成にかかる業務に多くの時間が割かれている。	【成果指標】 校務支援システムの利用による業務の効率化が図れたか。	校務支援システムの利用による業務の効率化が図れたという教職員が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	教職員に対してアンケート実施(7月・12月)	A	A	通知表の所見については、内容が不十分なものがあり、書き直し等の時間を費やした。来年度は、記述のポイント(目指す子どもの姿や育成する力)を明確にし、分掌担当において例文を作成するなど、適切かつ効率的に業務を遂行する。
⑧研修	主体的な研修への参加	教職員のニーズに応じた校内研の実施	教務部 研究部	ICT機器の効果的な使用の仕方を中心とした研修会や、全職員の教師力向上を図る研修会を行っている。	【成果指標】 研究授業や研修会によって教師力向上が図られたか。	ICTの研修において成果があったと感じる教職員が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員に対してアンケート実施(7月・12月)	A	B	85.7%の教職員が成果があったと答えている。先生たちのニーズに合わせて必要な時に必要な研修を適切な方法で行うことを継続する。
⑨保護者・地域との連携	家庭や地域との「めざす児童像」の共有、児童と保護者・地域との積極的な関わり	「総合的な学習の時間」「クラブ」等で家庭や地域の方の協力を得て、地域の教育力を教育活動に生かす。	総務部	児童から地域への積極的な関わりが弱い。	【成果指標】 家庭や地域等の外部人材を活用した教育活動に積極的に取り組んだか。	家庭や地域等の外部人材を活用した教育活動が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員に対してアンケート実施(7月・12月)	A	B	各学年2学期に1回以上、地域の人を学校に招いたり、地域へ向かいたりして教育活動を実施した。地域の教育力を教育活動に生かしたと判断できる。
⑩教育環境整備	自己存在感の向上、共感的人間関係の構築につながる教室・学校環境の整備	「COGS」学び合いハート「委員会」等で一人一人や集団の頑張りがよさが可視化できる掲示	総務部 生徒指導部	教職員の声掛け、児童の作品や活動の振り返りに対するコメント等、児童を認め、ほめることは増えたが、児童が自分(達)の良さを実感できるまで至っていない。	【成果指標】 自己存在感の向上、共感的人間関係の構築につながる教室・学校環境を整備できたか。	自己存在感の向上、共感的人間関係の構築につながる教室・学校環境を整備できたという教職員が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員に対してアンケート実施(7月・12月)	A	A	全職員が肯定的な回答をした。教職員が意識することで声掛けが増えたり、園工等の作品へのコメントだけでなく、自習や日々の授業のふり返りなどにコメントを添えてきた。また、児童間で互いのよさを認め合える活動を入れることができた。

学校関係者評価	CCG'sの取組はよいので、今後の改善策の取組を推進してほしい。 教職員の時間外勤務時間が長いように感じる。短くできるところは短くするなど、工夫した働き方改善を推進してほしい。 友だちのよさを引き出す活動や取組をさらに充実させて、自分にはよいところがあると意識できる子どもを今後も継続して育成してほしい。 あいさつについても取組を継続して推進してほしい。
---------	--